

第 13 回「市民と市長のふれあいトーク」の内容（要旨）

と き 8月12日（金）
テーマ 発達障害を持つ子どもへの支援
参加者 発達障害を持つ中学生の
保護者 4 人

発達障害を持つ中学生の保護者の皆さんから、子育ての大変さなどをお聞きし、市長と意見交換を行いました。

発達障害と向き合う

参加者 医師から発達障害であることを伝えられたのは、子どもが保育園児の時でした。その時、目の前が真っ暗になったと感じるほどの衝撃を受けました。

それ以来、子どもの様子を見守り、子どもの性格を知る中で工夫して育ててきました。発達障害を持つ子は、カーッととなったら大きい声を出したり、急に状況がわからなくなったりすることがあります。そんな時、声掛けをしてあげると落ち着きます。また、健常な子なら気に掛けないことでも、発達障害の子は素直に受け止めてしまうので、周りの人が少しずつ状況などを教えると安心します。保育園や小学校の先生、子どもの友だちなども、同じように我が子を見守ってくれる大切な存在となっています。

つながりを持った支援体制を

参加者 小学6年生までは、先生が、子どもができないようなことでも一度やらせてみて、それができたら自信を持てるように声掛けをしてくれて、子どもの特性を見ながら、できることを少しずつ増やしてくれました。

中学校では、例えば数学の授業では、文章問題よりも基礎計算に重点を置く傾向があります。最初からできないと決めつけず、それぞれの特性を見ながら、教え方を変えてもらえたら良いと思います。

また、来年度、教育委員会改革がなされる中で、保護者と学校、市長や教育委員会が一体となった支援の体制ができることを望んでいます。子どものこれまでの状況をよく知る保育園や小学校の先生と中学校の特別支援学級の担任の先生とがつながり、その子の性格を把握することで、一貫した支援ができるのではないかと思います。

市長から

大変な苦勞をされながらも、前向きに子育てをされていることに心を打たれました。保護者の皆さんの声を聴きながら、子どもさんの成長を支援することがとても大切だと思います。

今後は、行政も連携して、保護者や学校と一体となった支援体制を作り、子育てを支えていきたいですね。